

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	文末分析に関する一考察：児童の言語生態研究会編『はなちがナンでえ』を資料にして
Author(s)	小林, 照子
Citation	児童の言語生態研究, 11 : 49 - 57
Issue Date	1982-12-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045125
Right	
Relation	



文末分析に関する一考察

児童の言語生態研究会編『はなぢがナンでえ』を資料にして

小林照子

①子どもの言語生態研究について

1. 研究の意義

分析を始める前に、私が今後研究を進める上での大テーマである、子どもの言語生態について述べたいと思う。言語生態の定義といったものは、東京堂の国語学大辞典、平凡社の心理学事典でも、まだ明らかにされていない。関連事項として後者の498ページ「生態学的心理学 Ecological Psychology」を見ると次のようである。

人間生態学 human ecology. 心理学的生態学 psychobiological ecology ともいう。バーカー Barker, R. G. が一九五五年ごろ提案した言葉だが「生態学的心理学・Ecological Psychology」(一九六八)

「地域社会の生活の質 Quality of Life in Community」(一九七三)などによって、一般的に注目されるに

たった。

バーカーらの基本概念は、行動場面 behavior setting とよばれ、特定の時間・空間において起こる行動の型をさす。(後略)

今、仮りに、バーカーらの基本概念の中に示されている「行動」を「言語行動」に置き換えてみると、「言語生態学は、言語行動場面とよばれ、特定の時間空間において起こる言語行動の型をさす。」となる。これは単なることばの置き換えにすぎないが、この行動場面というとらえ方は、言語生態研究と関係があると思われる。公けの定義がまだ明らかではない言語生態であるが、その存在を否定することはできない。「言葉はすでにつくられてある思想を展示する行為ではなく、その思想そのものをわがものとする行為なのだ」というメルロポンティの言葉をかりると、「思想そのものをわがものとする行為」が「言語生態」で

ある、とも言える。子どもには、口だけの話術などありえない。うそをついても、大人にはすぐに見抜かれてしまう。それは、子どもの表現力が未熟だからではなく、うそをつく動機となった情動が、顔や態度やりに表われてしまうからなのだ。このことから、子どもの言語が単なる伝達記号ではないこと、その子の今日的な段階における、思考、情動と一体になっていることがわかる。ここで、記号性と情動性を言語の二面性と考えれば、この二面性が深くかわりあうところに、子どもの言語研究を位置づけなければならないということになる。まだとらえ方が抽象的ではあるが、このような位置における言語研究を、子どもの言語生態研究と呼びたいと思う。

2. 研究の方法

子どもの言語生態研究を具体的にどのような方法で進めるのかというところは、研究者として最も知恵を

絞らなければならないところであるが、新しい方法を生み出す仕事と同事に、日常生活における子どもの言語を採集する仕事も忘れてはならない。

「先生、けんかしているよ。」の声に、教室にいてみる。あさい君とまつだ君がけんかのまっさい中。あさい君がまつだ君を強く押した拍子に、まつだ君は机に顔をぶつけてしまった。まつだ君の鼻から、鼻血がたらたら……。押したあさい君はびっくりして、

あさい、「おまえ、鼻血、鼻血、」
ところが、まつだ君は一向に驚かず、腕で鼻血をさっとひとふき。たったひとこと、
まつだ「鼻血がナンでえ。」

まわりにいた男子は「えーっ」と声をあげるものゝ然とするもの。

それからしばらくの間、わがクラスの男子の間では、「鼻血がナンでえ。」が流行語になった。

これは、児童の言語生態研究会／上原輝男編・子どものことばの記録(スナップ)「はなちがナンでえ」・一九八一年童心社、からの抜粋である。

日常生活の中の、子どもの行動を注意して見ていると、だれでもこのような場面に出会うことがある。そんな時、子どもの言語行動を、ただ見過してしまわずに、なるべくそのまま採集し、記録するという仕事を忘れてはならない。そういった仕事を積み重ね、整理して作られた書物が、この「はなちがナンでえ」である。この本の紹介をかねて、子どもの言語生態研究の一つの在り方を、考えてみたいと思う。

子どもを考える者として、「子どもたちの今日的な段階を生きる精一杯のことば」を発見し、記録すると

いう仕事の重要性を思う。前に掲げた、まつだ君の発言も、うまいことばを使ったものだ、と感心するだけでは、単なることばの発見に終ってしまふ。しかし、まつだ君が、「鼻血がナンでえ。」と発言しなければならなかった動機を考えた時、ことばの発見は、子どもの生態の発見となる。たとえば、まつだ君の発言

「鼻血がナンでえ」を媒介にして、子どもの生態を発見しようとする時、表出された言語としての「鼻血がナンでえ」を分析すると同時に、四年生のまつだ君が、けんかというギリギリの場面に置かれた時の、興奮・逆上・開き直り・絶体絶命の抵抗といった、情動の在り方を検討することが必要となる。これから考えようとしていることばの言語は、単なる伝達のための道具としての言語ではなく、「鼻血がナンでえ」のように、発言の動機(情動)と深くかかわりあった言語である。

児童の言語生態研究会／上原輝男編「はなちがナンでえ」は、小学校教師が聞きとめた子どもことばの記録集である。副題に「ことばの記録」とあるが、この「スナップ」には、子どもことばを場面ごと採集したという意味が含まれている。掲載された289の場面は、学校生活時間内のもので大部分を占めるが、そこにおける人間関係は、各場面によって様々である。また、より生に近い子どもことばを想起する手懸りとして、場面ごとに、採集者による状況説明が記録されている。「はなちがナンでえ」が、何よりも「子どもたちの今日的な段階を生きる精一杯のことば」の記録であることを評価したいと思う。

しかし、それだけでは子どもの言語生態研究は進まない。この本を一つの読み物としておくのではなく、

中に掲載された子ども言語を分析することによってさらに新しい研究方法を生み出さなければならぬと思う。

②文末分析に関する一考察

1. 文末分析の意義

子どもの言語を、単なる伝達のための道具としてではなく、発言の動機(情動)と深くかかわりあう生態として研究する時、まず問題になるのが方法の立て方である。発言の動機となった情動をとらえるために、表出された言語を、どこからどのようにとらえたらいいのか、という点について十分に考え、一つの方法に頼るのではなく、いくつかの方法を立てなければならぬ。そこで、今回はその一つの試みとして、「はなちがナンでえ」に掲載された子どもことばを、文という単位でとらえ、その文末を分析することにした。ただ、この書物に掲載された子どもことばが、教師の耳で聞きとめられ、文字化されたことばであって、生のままの子どもことばだとは言いがたい点は、問題とすべきであるが、今回は、教師の言語意識によって認定され、表記された文を信頼することにして、資料に採用したいと思う。

資料を決定したところで、発言の動機となった情動をとらえるために、表出された文末に注目することの意義について考えたいと思う。話し手が聞かずに、何を、どのように語りかけ訴えようとしているのかを探るためには、話し手の発言を、どう分析したらいいのか、という疑問から出発しよう。まず、「何を」を知るためには、発言の内容、構成すべてを問題にしなければならぬ。そして、「どのように」を知るために

は、それに加えて、話し手の表情・身振り・しぐさ・音声(大きさ・強さ・速さ・音色・リズム・抑揚)を問題にしなければならぬ。「どのように」を知ることは困難であるが、発言の動機となった情動をとらえるためには、どうしても見逃すことのできない要因である。表情・身振り・しぐさ・音声と、どれも重要ではあるが、その中でも音声は、言語化に直接かわるものとして、特に重要であると考えられる。

生きた生活語としての方言研究者である、藤原与一氏は、「日本語方言方法の研究」の序説の中で、音声言語のとらえ方を示している。彼がここで、表現を「うねり」という比喩で表わしている点に注目したい。同書の四ページから「うねり」について述べられているところを引用しよう。

このやうな表現と一如の表現法は、比喩を以てすれば、まさに一個のうねりの如きものである。文表現の形が表現の法に支へられて、その内外に寸分も隙の無いものとなってゐる現實の言葉は、正に張り切つて伸び行く力として確認せられるのであるが、その具体的な力の姿がここにいふうねりである。極めて自在に表現された、而も一定の法格を有する文表現の形態が即ちうねりである。

ここにある「張り切つて伸びて行く力」「力の姿」「力」は、情動を指しているのではないだろうか。氏は同書の五ページでさらに、

ただ植物に見出されるその發展相のうねりや、人体の「頭―頸―胴―手足」の如きうねりに比べれば、言葉のうねりは眼に認め難い点が相違する。然し、かりにこれを圖示するならば、文表現はつゞのやうにも表してよい。

と、述べている。ここで、「文表現はつゞのやうに表してもよい。」とあるのは、「力の姿」を文字言語に見ようとするのではなく、あくまで生の音声に見ようとする、氏の構えからであるといえよう。

「うねり」という音声言語のとらえ方は、「日本語方言文法の研究」において、話部論という形で具体化されている。ここまで考えると、子どもの発言の動機となった情動をとらえるために、「うねり」というとらえ方で、子どもの発言を分析することが有効になるのではないかと、という仮説に到達する。そこで今回は、「うねり」のおさまるところである文末に注目して、分析を試みることにした。第一回目の試みを、文末分析から始めようとしたのは、文末には、話し手が聞き手に訴えかける構えが強く表われると考えたからである。この点に関しては、藤原与一氏の「方言文末詞(文末助詞)の研究」に学ぶところが大きい。確信を得るためにも、氏がこの論文の中の「I 文末詞(文末助詞)研究総論」に掲げた七項目を、ここに引用しておきたい。

A「訴え」は、表現者にとって本然のことと見られる。

A'訴えるのは、話し手の表現全体を聞き手に訴えるのである。知的なもの、情的なものとの渾融体を全的に相手に訴えるのである。

B訴えは呼びかけとも言うてよいと思う。

C日本語の対話の文表現では、文末部に訴え要素の出でくるのが大特色である。

D日本語生活での表現者たちは、日々の表現生活でしぜんのうちに、文末の特定の訴え要素を欲求している。

E話し手、表現者は、表現内容をひきまとめると

(「文表現がおわろうとする」と)その表現内容の確認を求めるとともに、文末で、特別の念おしを企て、そこに、さまざまの文末特定要素を産む。F日本語での、文末での訴え法―そこでの特定訴え要素の生成・流行は、日本語本来の欲求によるものである。

2. 「はなちがナンでえ」の中から

文末詞を拾い出す

文末詞の定義については、今後研究を深めた上で述べたいと思うので、今は、藤原氏の「方言文末詞(文末助詞)の研究」から引用した一部分を取り上げるだけにしておく。

C特定の訴え成分、文末詞と呼ばれるべき形成物について考えてみる。(中略)

文末詞は、文の末の詞である。これが出てくることはすなわち文の終止を意味する。だから、さきの東京語などの「アノヨ一。何々してヨ一。」などの場合も、私は「ヨ一」のところで「。」印をつける。

○アノ ヨ一、何々して ヨ一。

○きのう サ、どこどこに 行つて サ、.:.:。などのようにはしない。呼びかけことばの特定のものが出るたびに、文の表現はしめくられると見る。

文末詞の認定は易しいことではない。今回は、「特定の訴え成分、文末詞と呼ばれるべき形成物」ということばを頭に置いた上で、藤原氏の「日本語方言文末詞一覧」を照らしながら、「はなちがナンでえ」に掲載されている子どもの文、一文一文を検討し、文末詞があるものとなないものとに区別することを、一の分析

		感声的文末詞・ヤ行音		感声的文末詞・サ行音			感声的文末
		ヤ (1)	ヨ (303)	サ (27)	ゼ (16)	ゾ (8)	ナ (70)
～名詞つき (17) ()内は文例数			(女3)1・2・5年 1女 もちろん、おかあさんよ。 2女 このピースのゆびわちょうだいよ。 5女 そう、進歩よ。	(男3)5・6年 5男 かんたんよ。 6男 そうさ、面白よ。 6男 そりゃあ、十三日の金曜日よ。			
～動詞つき (91)			(女8, 男40)全学年 1女 わたし、あたまたきたときあるよ。 3女 えーっ、きゆうにいわれちゃこまるよ。 5男 もっと真剣にやれよ。 6男 どうも先生がいると目にさわるよ。	(男2) 5男 おい、おきなきいちゃうぜ。 6男 でも、なみだなんかでてくるぜ。	(男2) 3男 まだないているのかおこるぞ。 5男 皮肉だっている、ばかにされるぞ。	(男3) 1男 おかあさんがよくいうけど、わかるな。 4男 まったく、頭にくるなよ。 5男 きよう、いかに先生おこるなよ。	
～形容詞つき (85)			(女8, 男22)ほぼ全学年 4男 とくちは関係ないよ。 6男 青少年なんて、ぜったいかっこわるいよ。				(女2, 男7)1・5・6年 1男 ぼく、これすこしからいよ。 5男 うるさいなあ。
～副詞つき (2)							
～接続詞つき (2)							
～感動詞つき(1)							
助動詞つき	～ダつき (188)		(女21, 男94)全学年 3男 それがもう、きどってることだよ。 5男 ながられるほうは、ながられてるっていうだけでやたいんだよ。		(男14)ほぼ全学年 3男 あいついつでもそうなんだよ。 5男 先生ってやなんだよ。	(男5)1・3・5年 1男 うるさい、だまれ、おとこだよ。 5男 おい！未満だぞ。	(女2, 男18)ほぼ全学年 3男 いやだな。 6男 おれって、こき使われる人間なんだよ。
	～タつき (54)		(女4, 男21)全学年 2女 先生の字、てっきりまちがえたよ。 6男 花が咲くまえに、かれちゃったよ。		(男1) 6男 ついに天が正体をあらわしたぞ。	(男3)6才、5年 5男 先生は、ぼくらをぶじょくしたな。	
	～ナイつき (45)	(男1) 3男 よしい、いねえぞ。	(女9, 男18)全学年 1男 ぼく、やぐそくしてないよ。 3女 えーっ、でも、かお、あかくないよ。				(男2)5・6年 6男 ああいう、人をぶじょくしたことは、気に入らないな。
	～タイつき (5)		(男4)4・6年 6男 もうごぶさしたいよ。				(男1)5男 運営委員になりたいなあ。
	～ヨウつき (3)		(女1, 男1) 2男 それなら、わってみようよ。				
	～ラレルつき (1)						
	～デスつき (12)		(女2, 男2) 6男 ぜったいI君ですよ。				
	～ナつき(1)		6男 やめなよ。(男1)				
	～ガつき(1)						
	～ハつき (2)						
助動詞つき	～トハつき (1)						
	～チャつき (3)						
	～ツつき (3)		(男2)3年 3男 だって色えんぴつないしよ。				(男1)5男 それにイジだったしな。
	～テつき (26)		(女2, 男8) 5男 信じられなくなったりしてよ。	(女1, 男10)5・6年に多い。 6男 ガキだなんてばかにしてよ。			
	～デつき (2)			(男1) 5男 フグばっかしでよ。			
	～モつき (1)			(男1) 5男 いやだな、先生はさ、みんなもよ。			
	～テモつき(1)						
	～カラつき (9)			(男1) 2男 にくらしいからよ。			(女1, 男2)2・3・4年 4男 だって何時間待つかわかんないからな。
	～トカつき(1)			(女1)3女 エンピツとかよ。			
	～ダケつき (1)			(男1)6男 いやー、あれはくやしがつているだけよ。			
～ノニつき (3)		(男1) 5男 おれは、ふつうなのだよ。				(女1, 男2)2女おゆぶろだったらよかつたのよ。	
～ケドつき(3)				(女2, 男1)3女 そうでもないけどよ。			
その他(6)							
複合文末詞 (102)		<p>〔ヨ〕低学年に多い(女9, 男1)。 2女 ほんとうはねにきつたよ。 〔モソヨ〕(女1, 男3)3・5年 5男 おれたちの先生だもんよ。 〔ジャンヨ〕(男2)5年 5男 きもしけんよ。 〔ダツチヨ〕(男3)3・5年 3男 おひるねだつてよ。 〔カヨ〕(男2)5・6年。 5男 なんて真剣にやらないのよ。 〔アヨ〕(女2, 男5) 1男 そんなぶじょくしないよ。 〔アヨ〕(男3) 3男 おまえ、あんまり手をあげるなよ。</p>	<p>〔ゾサ〕(男1) 2男 なにもださなきゃ、なにもおきないよ。 〔ダツチサ〕(女1, 男3)1・5年 5男 失礼だつてよ。</p>			<p>〔カサ〕(女2, 男6)ほぼ全学年 1男 いてるって、いやな、おんなつてことかな。 〔ゾカサ〕(女2, 男5)2・5・6年。 5男 水に漬したのかな。 〔モソサ〕(男1) 6男 そうだよな、ひよこはこどもだもんよ。 〔ロサ〕(男10)3・6年 4男 こきまで自転車できたよ。 5男 人間にもあいつをつかすんだよ。 6男 けんかは進んだよ。</p>	

とした。

国立国語研究所報告8の「談話語の実態」(昭和三十年三月)によると、私どもの日常談話語では、じつにその73%に、文末特定要素と言うべきものをつかっているという。幼児も、いち早くこれをまねて、法外にまでこれをつかっているありさまである。というのは、藤原氏の意見であるが、子どもがいち早くこれをまねるといふのはなぜなのか、法外にまで使っているといつても一体どの程度なのか、ということの問題にしようとするのが、今回の考察のねらいでもある。

○六年男 みんなぜんぜんいうこと聞いてくれない
し：。(「はなちがナンでえ」P22)
○三年男 だって色えんびつないしよ。(P130)
○五年男 それに、ミジだったしな。(P147)
右の三例は、文末詞があるもの二例(三年男と五年男)と、文末詞がないもの一例(六年男)とに区別できる。このような分析の結果、「はなちがナンでえ」に掲載されている子どもの文のうち、約60%に文末詞の存在を認めることができた。また、学年によって、文末詞がある文の割合に多少の違いが見られ、低学年では約65%、高学年では約50%から60%というように高学年になると文末詞のある文が少くなる、という傾向が見られた。

3. 「はなちがナンでえ」の中の

文末詞を分類する

「はなちがナンでえ」に掲載された子どもの文の中から、文末詞がある文だけを取り出した後、それらを文末詞の種類によって分類することを、二の分析とした。分類の観点としては、藤原氏の方言文末詞一覧か

ら、感声的文末詞、転成文末詞を学び、それを採用した。今回の分析では、

感声的文末詞ヤ行音 ヤ・ヨ

サ行音 サ・ゼ・ゾ

ナ行音 ナ・ネ

カ行音 カ

助詞系転成文末詞 ノ・ダッテ

名詞系転成文末詞 モノ・モン

代名詞系転成文末詞 ワ

助動詞系転成文末詞 ジャン・デェ

の、15種類に分類することができた。

○三年女 だって、すきだと、顔、赤くなるんだよ。(P128)

○五年男 先生、苦しんでいる人がいいんだね。(P143)

○四年男 ひどいなぐさめかただな。(P134)

○三年男 てきに、うしろをみせてにげられるか。(P65)

○六年男 そうさ、命日さ。(P153)

○五年男 人がやらないうちにやれば、ぜったい勝てるんだぜ。(P139)

○五年男 ねえ、竜之介っていつ死んだの。(P146)

○一年女 だってじぶんがないちゃうんだもん。(P106)

以上の文例は、一つ一つ文末詞の種類が違うので、分類することができる。このように分類した時、文末詞によって文例数に大きな差が見られた。「ヨ」が303例で圧倒的に多く、次いで「ノ」が86例であった。三位は「ネ」の79例、四位は「ナ」の70例、五位は「カ」の41例となるが、「助詞系転成文末詞ノ」の二位を除

く、一位から五位までを、「感声的文末詞」が占めている。「転成文末詞」で文例が多かったのは、二位の「助詞系転成文末詞ノ」の86例と、六位の「名詞系転成文末詞モン」の28例であった。七位の「サ」の27例、八位の「ゼ」の16例(どちらも感声的文末詞)の他は、いずれも文例が10に満たなかった。

「はなちがナンでえ」に掲載された文について言えることとして、「子どもが獲得する文末詞は、感声的文末詞の占める割合が多く、中でも「ヨ」の割合が圧倒的に多い」ということが、ここまでの文末分析から明らかになった。

次にこの分析で注目したいのが、男女の違いである。

○三年男 まだないているのか、おこるぞ。(P25)

○一年男 うるさい、だまれ、おとこだぞ。(P24)

○二年男 おれんとこのおかささん、おとうさんよ
りつよいんだぜ。(P42)

○六年男 でも、なみだなんかでてくるぜ。(P74)

文例数が圧倒的に多い「ヨ」の他、「ネ」「ノ」「モン」は、男女の両方に文例が見られるが、「ゼ」「ゾ」の二つには、女の文例が一つも見られない。

「ゼ」の16例、「ゾ」の8例は、すべて男の文例である。また、「サ」「ナ」「カ」にも男の文例の方が圧倒的に多く見られた。

「はなちがナンでえ」に掲載された子どもの文は、7割以上が男の文なので、安易に文例数で判断することはできないが、日常の会話における、「ゼ」「ゾ」「サ」「ナ」「カ」の表われ方から考えても、これらが男の文例に多く見られたという結果は無視できない。ここで、「子どもが獲得する文末詞には男女差がある」という点が明らかになった。

もう一点、この分析からは、明らかな学年発達を見ることができなかったことを、おさえておきたい。どの文末詞にも様々な学年の文例があり、極端な学年の片寄りは見られなかった。強いていえば、「サ」には比較的高学年の文例が多いという程度で、それ以外に掲げられるものはない。

4. 「はなちがナンでえ」の中の文末詞を

「ノ品詞つき文末詞」に分類する

「はなちがナンでえ」に掲載された子ども文の中から、文末詞がある文だけを拾い出した後、それらを文末詞の種類によって分類し、さらに文末詞がついている語の品詞によって分類する、ということをも三分析とした。

「わたし、あたまにきたときあるよ」という文例なら、「あるよ」を分析して「ノ動詞つきのヨ」と名づけ、「先生ってやなんだぜ」という例文なら、「だぜ」を分析して「ノダつきのゼ」と名づけながら分析を進めた。

この分析によって、次のパターンが得られた。

ノ名詞つき ヨ・サ・ネ・カ・ダッテ・ディ

ノ動詞つき ヨ・ゼ・ゾ・ナ・ネ・カ・ノ・モン

・ワ・ジャン

ノ形容詞つき ヨ・ナ・ネ・カ・ノ・モノ・モン・ジャン

ノ副詞つき ネ

ノ接続詞つき ネ

ノ感動詞つき ネ

ノ助動詞つき

○ノダつき ヨ・ゼ・ゾ・ナ・ネ・ノ・モノ・モン

ン

○ノタつき ヨ・ゾ・ナ・ネ・ノ・モノ・モン
○ノナイつき ヤ・ヨ・ナ・ノ・モン
○ノタイつき ヨ
○ノヨウつき ヨ・カ
○ノラレルつきカ
○ノデスつき ヨ・カ・モン
○ノナつき ヨ

ノ助詞つき

○ノガつき ネ

○ノハつき ネ

○ノトハつき ネ

○ノチャつき ネ

○ノシつき ヨ・ナ

○ノテつき ヨ・サ・ネ

○ノデつき サ・ネ

○ノモつき サ

○ノテモつき ネ

○ノカラつき サ・ナ・ネ

○ノトカつき サ

○ノダケつき サ

○ノノニつき ヨ・ナ

○ノケドつき サ

この分析を横軸、三の分析を縦軸にして、整理したのが、「文末分析一覧表」である。この表を見ると、「ノ動詞つきヨ」の文例は48例もあるのに、「ノ動詞つきサ」の文例は1例もない。「おれにだってできるサ」のように、「ノ動詞つきのサ」に当たる文があるにもかかわらず、「はなちがナンでえ」の中には見つからなかったということは、何を意味するのか。また、「ゼ」の中で、「ノダつきのゼ」は二年生か

ら六年生まで、14例もあるのに、「ノ動詞つきのゼ」は五年と六年の二例しかない、ということは何を意味するのか。

さらに、「ヨ」303例の中で、「ノ名詞つきのヨ」を見ると女の3例しかないのに、「サ」27例の中で、「ノ名詞つきのサ」を見ると男の3例しかないということは、何を意味するのか。

以上の三点を考えただけでも、「ノ品詞つき文末詞」に分類することによって、二の分析でははっきりしなかった学年発達や、より細かい男女差がわかるのではないかと、十分に予想できる。

文例の多いものには、「ノダつき」の188例、「ノ動詞つき」の91例、「ノ形容詞つき」の85例、「ノタつき」の54例、「ノナイつき」の45例、「ノテつき」の26例、「ノ名詞つき」の17例、「ノデスつき」の12例があり、他はどれも10例に満たない。ここに掲げた以外の、「ノ助動詞つき文末詞」「ノ助詞つき文末詞」は、文例が少ない上に、特定の文末詞がつく例以外、つく文末詞の種類も少なかった。

また、「ノ品詞つき文末詞」は、各品詞によって、つく文末詞の種類に違いがある。たとえば、「ノ動詞つき文末詞」には、「ヨ」「ゼ」「ゾ」「ナ」「ネ」「ノ」「カ」「モン」「ワ」「ジャン」といった11種類の文末詞がつき、「ノ名詞つき文末詞」には、「ヨ」「サ」「ネ」「カ」「ダッテ」「デェ」といった6種類がつく、ということも比べても、その違いは明らかである。

男女差については、二の分析の中で、「ゼ」と「ゾ」に男の文例しかない点をおさえたが、ここではさらに、男の文例しかない「ノ品詞つき文末詞」を掲げたいと

思う。

○ 四年男 ぼく、もう離婚したいよ。(P 133)

○ 五年男 ばか、そんなこというなよ。(P 72)

○ 六年男 そりゃあ十三日の金曜日さ。(P 153)

○ 五年男 そんな、おせいじっちゃってさ(P 72)

○ 四年男 まったく、頭にくるなあ。(P 133)

○ 六年男 なんか、うそっぽいなあ。(P 155)

○ 五年男 からかっていないなら、いやがらせだな。(P 50)

○ 五年男 先生は、ぼくらをぶじょくしたな。(P 143)

○ 五年男 それ、先生にもいえるね。(P 27)

○ 三年男 おまえだって、いったじゃないか。(P 126)

○ 五年男 だから、わるいことで、じょうだんじゃ

ないの。(P 73)

ここに掲げた文例は、それぞれ文例数が3以上のものである。これを「し品詞つき文末詞」に分析すると、「しタイつきヨ」(男4例)、「しナつきヨ」(男3例)、「し名詞つきサ」(男3例)、「しテつきサ」(11例中男10例)、「し動詞つきナ」(男3例)、「し形容詞つきナ」(9例中男7例)、「しダつきナ」(20例中男18例)、「しタつきナ」(男3例)、「し動詞つきネ」(男4例)、「し形容詞つき力」(男17例)、「し形容詞つきノ」(14例中男12)と、なる。一応、「これらは女子より男子に表われやすい。」ということをおさえておくことにする。

これらに対する、女の文例しかない「し品詞つき文末詞」は今見られなかった。文例の半分以上が女だというものを選んで、

○ 三年 わー、先生、おぼえてくれたの

(P 128)

○ 二年女 ううん、につきかいていないの。(P 65)

と、いった、「しタつきノ」(20例中女12例)、「しナイつきノ」(12例中女が6例)の二種類だけであった。

しかし、複合文末詞の中には、女の文例しかないものもある。女子に表われやすい文末詞については、

四の分析で明らかになると思う。

学年発達については、三の分析においても、それぞ

れの文例に、極端な学年の片寄りといったものは見られなかった。ただ、比較的低学年の文例より高学年の

文例が多い「し品詞つき文末詞」は、いくつも見られた。

○ 六年男 ぜったい、I君ですよ。(P 73)

○ 六年男 かえしてもらっていいですか。(P 61)

○ 五年男 かんたんさ。(P 140)

○ 六年男 でも、なみだなんかでてくるぞ。(P 74)

○ 五年男 皮肉だって、ばかにされるぞ。(P 72)

○ 六年男 ああ、人ぶぶじょくしたとば、気に入らないな。(P 76)

○ 五年男 ないでなんかないね。(P 52)

と、いった、「しデスつきヨ」(4才女、3才女各1例、六年男2例)、「しデスつきカ」(三年女、男各1例、四年男3例、六年男2例)、「し名詞つきサ」(五年男1例、六年男2例)、「し動詞つきゼ」(五年男1例、六年男1例)、「し動詞つきゾ」(三年男1例、五年男1例)、「しナイつきナ」(五年男1例、六年男1例)、「しナイつきネ」(三年男1例、五年男1例)が見られた。文例数が少ないため、これらが

低学年に獲得されにくいと言いつけることはできないが文末詞から学年発達をとらえる手懸りにはなる。

5. 「はなちがナンてえ」の中から複合文末詞を拾い出す

助詞が複合した「ヨナ」「ヨネ」「ノヨ」などのように、一まとまりの複合体として、特定の訴え成分があると判断できる場合には、それらを「複合文末詞」として拾い出すことを四の分析とした。その際、「ヨナ」の場合は末尾にある「ナ」をとって「ナ」の複合文末詞に、同じようにして「ヨネ」は「ネ」の複合文末詞、「ノヨ」は「ヨ」の複合文末詞」というように分類した。四の分析からは、どの文末詞にも複合文末詞ができるとは限らないこと、複合の仕方にも何らかの決まりがあることが明らかになった。

感声的文末詞ヨの複合文末詞

ノヨ・モンヨ・ジャンヨ・ダッテヨ・ノカヨ・デヨ・ナヨ

感声的文末詞サの複合文末詞

ノサ・ダッテサ

感声的文末詞ナ

カナ・ノカナ・モンナ・ヨナ

感声的文末詞ネ

ワネ・ノネ・ヨネ・モンネ

感声的文末詞カ

ノカ・ジャンカ

助詞系転成文末詞の複合文末詞

ナ

感声的文末詞、転成文末詞15種類を「はなちがナンてえ」の中から拾い出したわけであるが、そのうち複合文末詞の見られたものは、前記の「ヨ」「サ」「ナ」

「ネ」「カ」「ノ」6種類だけであった。「ノ」以外はすべて感声的文末詞だということも、おさえておきたい。

- 一年女 ふうちゃん、そういうの、むだつていうのよ。(P 116)
- 三年男 おれ、こいつくらいだもんよ。(P 32)
- 五年男 いやじゃんよ。(P 73)
- 三年男 おひるねだつてよ。(P 43)
- 五年男 なんて真剣にやらないのかよ。(P 58)
- 一年男 そんな、ぶじょくしないでよ。(P 111)
- 三年男 年よりじみて、休むなよ。(P 126)
- 二年男 なにもださなきや、なにもおきないのさ。(P 122)
- 五年男 失礼だつてさ。(P 40)
- 一年男 ぼく、いくのよそうかな。(P 42)
- 二年男 ぼくつて、そんなに、えらいのかなあ。(P 119)
- 六年男 そうだよな、ヒヨコはこどもだもんな。(P 74)
- 四年男 ここまで自転車できたよな。(P 47)
- 四年女 いたいわね。(P 135)
- 二年女 ふうちゃんつて、ちつともわかっていないのね。(P 65)
- 三年男 ぼくたち、かんけいないよね。(P 125)
- 五年男 今、いじけているところだもんね。(P 52)
- 六年男 ヘッヘー、反省に色なんて、あるのか。(P 33)
- 五年男 でもさ、パチンのまえに、攻撃すればいいじゃんか。(P 140)

○ 二年女 これ、ちよのにつきなの。(P 65)

以上の文例、一つ一つには、今回拾い出した20種類の複合文末詞が見られる。これらの文例数は、合計102例であった。

複合文末詞にも男女の違いが見られた。男の文例が多い複合文末詞には、「しジャンヨ」(男2例)、「いダッテヨ」(男3例)、「しノカヨ」(男2例)、「しノカ」(男5例)、「しヨナ」(男10例)、「しカナ」(8例中男6例)、「しノカナ」(7例中男5例)があり、女の文例が多い複合文末詞には、「しノヨ」(10例中女9例)、「しワネ」(女3例)、「しノネ」(女2例)、「しナノ」(16例中女10例)がある。

おわりに

子どもの発言における文末分析が、発言の動機となった情動をとらえるための方法として、どこまで有効なのかという点を試すことが、今回のレポートのねらいでもあった。そのために、①子どもの言語生状態について、で研究の姿勢を明らかにするよう努力した上で、②文末分析に関する一考察に入った。文末分析では四つの観点を立て、それらを総轄した「文末分析一覧表」を作った。文末詞の定義については、「感声的文末詞」「転成文末詞」の意味に触れていない点など、学習不十分な面が多い。また分析の際に「し動詞つきヨ」と言ったり、パチンの命名にもあまい面がある。今回のレポートは、表出された言語の分析にとどまっただが、この分析から、男女差、学年発達の手懸を得たのは収穫だった。子どもから表出された発言の文末にこのような手懸を得られたことから、発言の動機となった情動をとらえるための方法として、今回の

分析は有効だと考えられる。

次に考えなければならぬのは、③文末分析から見た子どもの情動、ということになる。そのためには、今回取り上げなかった、発言の場面、話し手と聞き手の人間関係が大きな要因となる。また、今回は「はなちがナンでえ」という書物を資料としたが、すでに文字化された資料の限界を考えると、今後は、より生に近い子どもの発言をとらえる方法も考案するべきである。情動をとらえるためには、先に述べた、表情・身振り・しぐさ・音声に加えて、生理的、現象的な視点からも、言語、言語行動を研究しなければならぬと思う。夢は次々に広がるが、その中のどれを選択し、どれを切り捨てるかという決断も必要になる。今は、ここで文末に注目したことを大切に、今後そこから発展した研究を考えたいと思っている。今回の分析を分類のための分類に終らせることなく、本来の研究目標である、「子どもの言語生状態研究」に生かすためにも、④を仕上げ、次の計画に入っていくと考えている。

引用文献

藤原興一「日本語方言文法の研究」

S 二十四・十二 岩波書店

同 「広島大学文学部紀要」特輯2

一九七二年二月

M・メルロー「ポントイ」竹内芳郎他訳

「知覚の現象学2」

一九七四年 みすず書房

◎ 研究を進める際、多くの助言を戴いた、神部宏泰先生、兵教大・神部ゼミの皆様、深く感謝したい。(東京・町田南四小・教諭 兵庫教育大学院生)